

宗谷の開拓を大きく進めた

梨本 弥五郎

幕末に近い安

政の時代、女性や子どもを伴って宗谷に渡航し、江戸幕府の役人として、初めて



〔復元されたストーブ〕
(稚内市北方記念館蔵)

宗谷で越冬を果たした人物が、梨本弥五郎です。また、厳冬の地で生活するには欠かすことのできないストーブを、日本で初めて製作させたのも弥五郎でした。弥五郎が残した成果は、宗谷や北海道の開拓を大きく進めたと言われています。

弥五郎は、一八一四年、江戸に生まれ、江戸幕府の役人として勤めていました。

一八五五年には、江戸幕府が蝦夷地を直轄地におき、箱館（今の函館）奉行は、開拓を活発化させるために、積丹半島の神威岬より北への和人移住を促進しました。

このとき箱館奉行所支配調役下役元締という役職に命じられ、宗谷詰に赴任したのが弥五郎だったのです。

弥五郎は、女性や子どもを連れて神威岬より北の海を越え、宗谷に向かいました。

幕府が、蝦夷地を直接支配する前、松前藩が蝦夷地を支配していました。この時代、松前藩は神威岬を女性や子どもに乗った船が越えることを禁止していました。その理由は様々あるようですが、その昔、

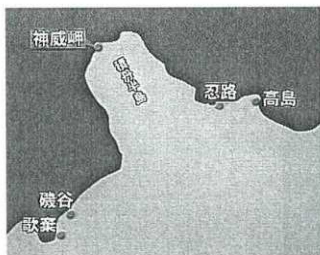
源 義経に捨てられたとされる娘が魔神となって現れ、女性

性が乗った船を風波を起こして沈没させる、という恐ろしい伝説が和人の中にあつたのです。

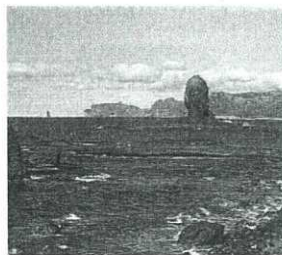
実際、その場所はとても波が激しく、船の遭難により亡くなった人も多くいました。そこから、女性を寄せ付けない岬の

恐怖の話は、藩内では知らぬ者はないほどになったのでした。

そして時が過ぎ、幕府が直轄するようになってから実



積丹半島の図



女人禁制の伝説の舞台。積丹半島神威岬

（「人間登場第二巻」 北海道出版企画センター）

際に開拓を進めた箱館奉行は、これをいわれのない迷信めいしんだとして、この禁止令を廃止はいししました。しかし、奉行所がいくら「いわれのない」と、岬の通行を許可しても、長年の恐怖心はぬぐえず、誰一人だれひとりとしてこれを越えようとする者はいませんでした。そんな時に赴任してきたのが弥五郎たちだったのです。

弥五郎は、部下三人ともども妻子を伴って宗谷に赴任しました。中には、身ごもっていた部下の妻もいました。そこで弥五郎は、いまこそ迷信を打破しようと考え、渡航を試みるのです。それは一八五六年、春のことでした。

弥五郎は、妻子を連れて神威岬を越えたいと船の船頭に伝えると、船頭は恐ろしがつて、これを拒否きよひしようとした。しかし弥五郎は、

「こんな迷信がはびこっていたのでは、蝦夷地の開拓は進まない。」

と、船頭を説得しました。こうして弥五郎は箱館を出発し、やがて神威岬にさしかかりました。

岬に近付くと、言い伝えのとおり、海は荒れ模様あやぶらみとなつていきました。船頭たちは魔神の怒りいかだと恐れ、引き返すよう弥五郎に願い出しましたが、弥五郎はそんな状況じやうきやうを恐

れず、岬の岩に向かつて、

「私は將軍の家来である。この国のために、奥の蝦夷地を開こうとしているこの時、どこの神がこれを阻止そししようとしているというのか。婦人の通行を妨さまたげて、この奥地がどうして開けよう。」

と叫び、岩に向け銃じゆうを撃うちました。船頭たちは、これに元氣付けられ、無事に神威岬の沖おきを渡りきったのです。

この渡航以後、女性や子どもを伴った和人が通行するようになり、家族ともども、蝦夷地への移住や定住が進んでいきました。現代では想像もつきませんが、長い間信じられてきた女人禁制にょにんの呪縛じゆばくを解くのは、大変勇氣のいることだったのです。

さて、宗谷詰への赴任には、渡航以外にも問題がありました。それは、宗谷の地で冬を越すということです。和人の越冬自体は、すでに別の人が行っていました。が、これまでの越冬は、薪まきや炭を焚たいてしのぐ程度であり、寒さや食料不足などの問題により、多くの犠牲者ぎせいしやが出ていたのです。

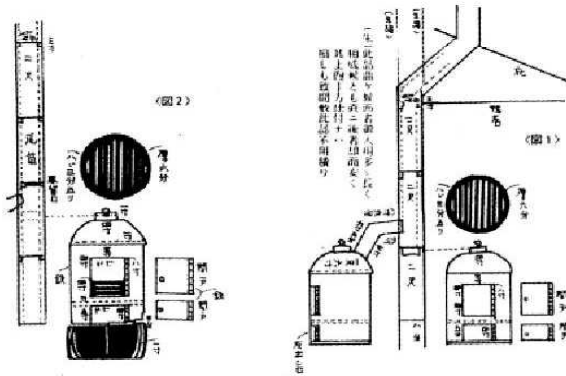
弥五郎は、宗谷に赴任する前から、この問題について考えていました。それは、そこに住んでいる人々の家屋の修繕しゅうぜんと、「カッヘル」という暖房器具を用意することで

す。

カッヘルとはオランダ語でストーブのことを言います。実は弥五郎は、オランダ語で書かれた文献^{ぶんけん}を読んでカッヘル^{カッヘル}の存在を知っており、この越冬には、カッヘルが不可欠だと見抜^{みぬ}いていました。

幕府は、一八五六年二月、蝦夷地の各地で勤務する役人に、この問題への意見を求め、弥五郎の意見を採用しました。弥五郎は、自分の意見が採用されるとすぐ、箱館に停泊^{ていはく}していたイギリス船に出向き、本物のカッヘルを見学し、部下に命じて、このカッヘルを参考に^にして設計図を描かせました。

そして、この設計図をもとに、奉行所は二十二台のカッヘルを箱館で^{*}^{ちゆうぞう}鑄造し、宗谷に十一台、残りを北方各地に送る計画を立てました。こうした^{ばんぜん}万全の準備の中、弥五郎は



〔カッヘル^{ほんこく}の設計図〕（北海道立文書館蔵資料を翻刻）
小川昭一郎 道都大学社会福祉学部編第26号(2001年)
「資料翻刻⑥モンハツ場所諸件書付(四)」43頁より

宗谷に赴任していったのです。

しかし、カッヘルを製作していた職人たちが不慣れだったため、カッヘルの製作がうまくいかず、越冬に間に合う時期までに完成したのはわずか六台でした。そのうち二台は樺太^{からふと}に送られることになっていたので、宗谷に送られるのは四台しかありませんでした。しかも、完成したカッヘル自体が、時化^{しけ}のため箱館港に足留めされ、弥五郎の宗谷の地での越冬には間に合いませんでした。

せっかく勇気をもって妻子たちと渡航し、宗谷にたどり着いた弥五郎でしたが、越冬できるかというところでピンチに陥^{おちい}りました。部下の妻の出産も近づいていて、宗谷を離れるわけにもいきませんでした。そこで、弥五郎は決断します。

「自分たちの力でカッヘルを造ろう。」と。

弥五郎が宗谷に赴任した当時、宗谷に和人はほとんどいませんでした。アイヌの人たちがほとんどの中で、弥五郎はある人を訪ねます。それは、昔から宗谷に住むアイヌの鍛冶屋^{かじや}である景蔵^{けいぞう}という者でした。弥五郎が景蔵にカッヘルの設計図を見せると、
「任せておけ。私が造ってやる。」

と言ひ、すぐに取りかかつてくれました。

カツヘルは、鉄の塊かたまりを叩たたいて鉄板にして造るので、製作には景蔵だけでなく、多くのアイヌの若者たちが協力してくれました。こうしてカツヘルは完成し、弥五郎の部下の家に取り付けられました。一八五六年十一月のことでした。おかげで部下の妻は、暖かいところで赤ちゃんを産むことができました。

こうして、カツヘルを造ろうと決意した弥五郎、そして、それに応こたえた景蔵と協力したアイヌの人たちのおかげで、宗谷で暖かい冬を過ごすことができるようになったのです。

その後、弥五郎は箱館もとに戻り活躍かつやくを続け、各地で開拓けんたくに尽力じんりよくしたのです。

一八一四	江戸（現在の東京都）で生まれる
一八五五	箱館奉行支配調役下役元締に任ぜられる (四十一歳)
一八五六	神威岬を妻子を伴って渡航し、宗谷詰に赴任する
一八五七	日本初のストーブを製作する(四十二歳)
一八六七	箱館に帰任する(四十三歳)
	死去する(五十三歳)

* 蝦夷地：昔の北海道の呼び方

* 直轄地：直接支配すること

* 支配調役下役元締：田畑かいこんの開墾や奉行所の仕事を行う

う役職

* 宗谷詰：宗谷役所への駐在

* 鑄造：金属を溶かし、型に流して器具を作ること